



【2018-07-18】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週の雑感

「改善ごっこ」に陥って
いるので
は？

長野修二

「改善ごっこ」に陥っているのでは？

大手企業のように安定的に収益を上げているところでは、毎年新卒者が入り、仕事のローテーションがおこなわれ、仕事や組織の機能がうまくいっているように感じるものです。

そのような中で毎年改善活動はおこなわれています。

人間はどうしても今より良いやり方があると考えますが、それ自体は、なにも問題はありません。

他方、改善を担当する人間には、多くの課題があるものです。

当然ですが、人間は一人ひとり違います。

また、入社してからしてきた仕事の経験や仕事の進め方は、組織の中で同じように学んでいるように思えますが、実際は、人がそれぞれ違うように仕事の理解や体得の仕方も一人ひとり違ってきます。

現在感じることは、改善活動が「改善ごっこ」になっているのではないかと感じます。

理由は、いたって簡単です。

現場の意見を聞いていないからです。

こうしておこなった改善は、改善を進める担当者の頭の中にあるイメージだけでしょう。

そして実行に移してみると、改善どころではなく、現場は混乱と生産性の低下にあえいでいます。

いわゆる現場が疲弊してくる状況でしょうか。

とくに下請け企業に一定業務を移管している大手企業ほど現場をないがしろにしているのではないのでしょうか。

そこには請負契約による業務委託という理由が存在するからでしょうが、実際に作業している多くの人たちとコミュニケーションを取ることがむずかしいことがあげられます。

下請け企業の責任者とある程度打ち合わせはするのですが、下請け企業の責任者の業務把握能力にも問題があると、想像されます。こうして現場の実態と乖離し、改善活動は「改善ごっこ」へと変身し、末端の作業量は増加し、生産性がより低下しているのが現状ではないのでしょうか。

一人ひとりの作業量があがり、さらに作業内容が整然としたものになるような改善をする場合、どのような就労形態であれ現場を入れて問題の洗い出しをおこなわない限り、真の改善はあり得ません。今では「下請け企業」を「協力会社」と呼ぶようですが、日本の実態はあくまで下請けなのです。

協力会社であれば、全員参加型の改善活動になるはずですが、このようなことをおこなえば、一時的にコストが増大します。

とにかく面倒でコストがかかることを避けて通っているのが現在の日本企業の特徴でしょう。

このような現状に甘んじているのは、まだ大手企業には成長余力があるからですが、このような問題も少子高齢化で人手が不足してくれば、本当の意味で「改善」といわれる活動に変わっていくのかもわかりません。

ゆるみきった体制は、企業に限らず私自身の生活の中にもありそうです。

災害に対する準備や心がまえなども真の改善が必要なところでしょうか。

その点では、私自身が真っ先に「改善ごっこ」をやっているようです。

大いに反省し、改善ごっこから真の改善へ改めなければならないようですが、この地は地震危エリアの中で全国一ですから、早晚痛い目にあって自身の目が覚めるような気がします。

災害で被災した人たちをどこか遠くでみている自分がいます。

このように企業の改善を批判している私自身が、一番愚かな生き物のようです。

人間というのは、どこまでいっても理解や体得には限界があることを知り、現場（企業の現場、災害現場等々）から学ばなければならないことがあるのではないのでしょうか。

まして頭の中（バーチャル）だけで考えたものが、いかに無意味かは、多くの事象が教えてくれているようです。

